

# 信頼回復と、価値観の提示 二項対立を超えるには・・・

小出重幸

2018年03月20日 @原子力小委員会

# お話しのポイント

- 1) National Security of Energy
- 2) 考え方の起点 信頼回復
- 3) 信頼はどのように失われたか
- 4) コミュニケーション 届けるとは
- 5) 両極端を外して、Majorityに発信
- 6) 個別から 協働プラットフォームへ
- 7) 次世代に、方向性、価値観を示す

# National Security of Energy !?

- 2012年05月、北電・泊原発停止  
→ 国内の全原発が停止
- ICL **Science Communication**での討論
- *日本には、ロシアの天然ガス供給ラインが?*
- *朝鮮半島から、Gridが通じているの?*
- *日本では、いったいどうなっているんだ?*
- 資源小国日本、唯一の資源はなにか?
- ものづくり Innovation Material science

# Finlandのエネルギー戦略

- チェルノブイリ事故、原子力廃止の世論
- ロシアの天然ガス、ロシアの原発依存
- 冬季を過ごすためのエネルギー源
- 自前のエネルギーを拡大すること
- National security of Energyという視座
- 音楽家、芸術家・・・ロジカルなメッセージ
- 第二次大戦での悲劇
- 地雷撤廃(オタワ)条約加盟も、2012年まで

# 福島事故 でも“あの人たち”には・・・

- ものづくり、Innovation 基幹産業は不可欠
- それを支える 安定電源とNational Grid
- 化石燃料、風力・太陽光などの再生Energy
- 原子力を、選択肢から外すべきか？
- 一部を原子力で支える 多くの国民が理解
- でも、事故後のめちゃくちゃぶりは、なんだ
- 日本には本当に事故対応能力があるのか？
- “あの人たち”は信用できない・・・
- やってもらいたくないね → 世論調査結果

# 最大の原因：コミュニケーションに失敗！

Public communicationなし → 社会の混乱

- 二つの大きな要因

- 1) 原発事故の情報公開に失敗

→ 炉心溶融2か月間隠蔽(マニュアルが・・・)

- 2) 放射性物質の拡散動向

→ 拡散予測システム(SPEEDI)の非公開

- 結果は、大きな社会的混乱の発生

→ なぜ、だれに、伝えるのか 思想の欠如

# 情報はなぜ発信されなかったか？

- 首相官邸→ 機能不全、情報収集無力
- 東京電力→ 情報隠し、責任逃れ、能力限界
- 原子力安全委員会→ 伝える意識なし
- 原子力委員会→ 自分の“任”ではない
- 原子力安全保安院(経済産業省)

→ トップ(保安院長)の逃走

シビアアクシデント対策、無視してきた結果

→ 情報集約法、指揮系統、決定主体.....

# 不信の深さ

- <事故の対策が不十分だった>
- 技術のエラー・・・だけなのか？
- 住民や国民の気持ちを理解しようとしなない
- 国民の立場 < 行政、電力業界の都合
- 立法・行政の組織、制度、人材、文化・・・
- 不信は、重層的で広範なもの
- 技術的背景 < Human aspects

# 原子力利用の必須条件・・・？

- Finlandの例；オルキルオト、STUKなど取材
- Helsinkiで文化人らとの交流会、原子力政策
- ここでもやはり、National security of energy
- 「技術のことは、わからない」、「でも彼らがそれで良い、というなら、判断を信頼する」
- 「技術者の不断の努力なしに、原子力の安全は担保できない。でも、技術者を信頼する市民の支えなしに、原子力利用は進められない」(向坊隆)

# まず、逃げない姿勢を示せるか

- 原子力の経済性 いま、みんなが関心を持つ
- 大型軽水炉 それぞれの状況に応じた試算
- 根拠を示す、それを公開する(隠蔽・改ざん・破棄しない・・・)
- Evidence basedの政策決定
- Openness & Transparency だれでもトレースできるようにする
- 極端なアジテーション 視野狭窄な推進
- 情報を必要としている人たちに、届けること

# 信頼回復にはなにが必要か

- 失敗に学ぶ姿勢を示せるか；英国狂牛病調査報告書（BSE Inquiry Report 2000）の公開
- 根底に戻って考えることを、呼びかける
- 使わない選択の場合 → メリットとデメリット
- 原子力の選択肢を外さないのであれば → 使う際のリスク、経済性を吟味
- 事故のリスクがある、制御への努力もある
- 思想・価値観を、メッセージとして伝える必要

# “科学コミュニケーション”

実践的な試み 日本ではこれから

- 原子力開発の歴史 被爆 Atom for peace
- 激化する相克の中で、見ないふりをし続けてきた
- 高レベル放射性廃棄物対策 1994年まで頼かむり
- 近藤次郎さんのメッセージ、有本建男室長
- コミュニケーションの原点 発信、発言……ではなく、  
、こころに届けること
- 失敗から学ぶという面では、英国Science communicationのケースが参考になる
- 安全と安心の違い リスクゼロの呪縛 リスクは有る

# Vision・思想 メッセージとして発信する

- エネルギー情勢懇談会 方向性を示さないと、若手の人材育成もできない・・・
- 何がこれからのエネルギー政策か!?
- それには、個々に発言するのではなく Unite することが欠かせない
- Stakeholders協働のプラットフォームが必要
- 統合したメッセージが発信される場には、メディアの記者が集まらざるを得ない

# プラットフォームの意味

- 「石棺」問題 → 二重に信頼を失墜
- 「統合的な視座」を示す必要があった
- トリチウム問題も・・・科学的には理解できる
- リスクとベネフィット 避難計画、公衆衛生、地域・消費者、技術課題、環境インパクト
- これらをオープンにした上での、討論のプラットフォームを
- そうしたプラットフォームでの議論がないと、県民を抱える自治体は動けない（内堀知事）

Short term best politics

&

Long term best policy

次世代にどんな価値観を伝えるのか？

ありがとうございました。